

棚田通信

NO13 2011.8

NPO法人 恵那市坂折棚田保存会

なごみの里だより

東日本震災と棚田

3月11日発生東北を襲ったマグニチュード9.0という大地震、大津波そして福島原発の崩壊という何千年に1回という大震災でした。この震災に遭遇された方々、また犠牲になられた多くの人達のご冥福と一日も早い復興をお祈り申し上げます。

当保存会としても、中日新聞社会福祉事業団を通じて、棚田広場に設けた募金箱に入れて下さった皆様のお金と共に義捐金を送らせていただきました。

東日本大震災は大地震、大津波という天災と原発の被害という人災というべき二つの災害に見まわれたものと考えます。

さて私共の棚田と同地域においても大地震による災害を受けた地域があります。長野県栄村と新潟県十日町市、津南町です。3月12日の早朝に震度6強の地震におそわれたのです。栄村では、震災当時はまだ雪の中で、建物の被害は目立ったのですが、棚田は2m以上の雪に埋もれていて農地の被害はわからなかったのです。雪解けとともに被害の大きいことが判明したのです。すなわち亀裂、崩壊地が現れたのです。ここ栄村は中山間地で過疎化、高齢化、農地の荒廃化など多くの問題が生じているようです。

坂折棚田と災害

さて、当地の棚田においては、昨年8月の集中豪雨で石積みの崩壊が2ヶ所ありましたし、坂折川の護岸が崩壊したという災害を受けております。幸い、国の災害復旧工事での3月修復がなされたところです。坂折棚田においては、地震による石積みの崩壊は今のところありません。しかし石積みの崩壊が目立つようになってきました。



目立つようになった石積みの崩壊

坂折棚田の特徴は石積みの棚田です。明治時代に現在の棚田が完成されたと言われております。

急傾斜地の棚田は、野面積みといわれる石積みによって造成されています。1940年代までは主として人力か牛馬によって耕作されて来たのですが、農業の機械化が進んで来た現在では小型ですがトラクタによる耕作が行われるようになって来たことによって、踏圧による石積みへの影響が大きく、石積みの崩壊が目立つようになったと思われまます。

棚田の自然と保全

近代的な農法は、科学的な手法を取り入れることによって、作業が楽でしかも生産量も上って来たのですが、棚田の維持や補修については美しい景観を保つために多くの人手（労力）が必要になってきています。なるべく自然環境を崩壊することなく棚田の保全を行うような手法を考えなければなりません。美しい棚田を保全するためには、多くの人達による支援が必要になります。自然の恵みを後世に伝えるためにも、棚田環境を守ることの大切さを国民の皆様理解してもらわなければならないのです。

坂折棚田との不思議な縁

オーナー 岩崎 建彌



私が坂折棚田で米作りを始めたのには、二つの偶然が重なっています。
新聞社の定年を1年後に控えた11年前の春、初めて木曾の馬籠宿を妻と車で訪れました。
その夜は、恵那の笠置山近くにある会社の研修所を予約していたので、中津川から福岡町（現中津川市）へ抜けて、研修所へ向かいました。

途中で、別荘地の売り出しをしていました。冷やかしにモデルハウスだというバンガローを少し大きくしたような建物をのぞくと、中は、太いはりのある山荘風の造り。私は飛騨の生まれで、定年後は、半分は山の中で農業をして暮らすのが夢でした。その夜、妻に話し、年金生活でも何とかかなりそうだったので、翌日には契約しました。

ところが、定年後もしばらく新聞社に勤め、さらに大学でも教えることにもなりました。山荘に行くのもままなりません。夢のままで終わってしまうのかと、あきらめかけていたとき、たまたま会社の元同僚の長谷川勲君から耳寄りの話を聞きました。「恵那の棚田で、今年から米作りをするよ」。大学も辞めた2年前の春のことです。田植えの日、おにぎりを持って坂折へ行き、一目見て惚れ込んでしまいました。そして、古稀を迎えた翌年からオーナーになったのです。

生まれて初めての妻や子どもたちとの米作り。田植え、雑草取り、刈り入れ・・・どれも新鮮で、充実感のある作業でした。何よりも「これで命を支えてくれる大地へ、いくばくかのお返しができる」という感謝と安らぎの気持ちが沸いてきました。

山荘を持ったのも、米作りも、偶然から始まったのですが、二つは10年という時間を超えてつながっていました。山が呼んでくれていたのです。

名古屋の自宅の机には、初めて作った米が飾ってあります。ちょっといい眺めです。



坂折棚田の草分け下島弘行さんポストカードを寄贈

坂折棚田が日本棚田百選に選定される前から下島さんは、坂折棚田のすばらしい景観に魅せられて写真撮影を続け、写真展や雑誌に投稿、またポストカードの作成など精力的に取り組まれ、広く坂折棚田を紹介されました。このほど沢山のポストカードを当保存会にご寄贈下さいました。

坂折棚田の撮影にあたっては、種々苦労されたとのことですが、下島さんの写真が契機となって、今日坂折棚田が日本全国に伝わったのだと思います。本当に有難うございます。



第6回 坂折棚田オーナー交流会

平成18年に始った稲作オーナー制度は今年で6回目となりました。今回はオーナー募集目標の50組が達成できました。

参加者の内訳は、毎年参加者70%、新規参加者30%の割合です。棚田という環境で稲作りをする楽しさ、自然の中で作業することの快適なこと、さわやかなこと、また子供達は泥んこになるという体験は、人間の本能的な欲求を満たすことと思います。誰でも一度は体験してみる必要があるかもしれません。そこから自然の営みを感じ、棚田という美しい景観を守ることの大切さを実感していただくと考えており、保存会の会員としても大きな喜びです。

5月28日(土)天候が心配された、第6期坂折棚田オーナーの田植えですが、田の神様に守られている坂折です、なんとか大降りにならず、無事終了しました。小さなお子さんも楽しんでくれたようです。お昼には、中野方まちづくり委員会心づくしの「棚田汁」(猪汁)も振る舞われ、オーナーの皆様にも好評でした。



私たちもお手伝い



特製棚田汁仕込中

7月2日(土)第6期坂折棚田オーナー草取り、田植えの時は、はらはらしたお天気も草取りの日は良い天気となりました。今回は初めて、坂折棚田が一望できる権現山への登山も行われました。参加者は坂折の氏神様『権現神社』の上社に参拝後、山伏岩より坂折の眺望を堪能しました。



山伏岩までヨイショ!ヨイショ!



上権現様の前で記念撮影

平成22年度 坂折棚田オーナー制度アンケートの集計結果

第5期オーナーの皆様へ実施したアンケートの結果、参加して「大変良かった」77%「良かった」23%という回答を頂きましたが、恵那市坂折棚田保存会の受け入れ体制には「良くなかった」という回答が1%ありました。私共もその原因を探り、これからの運営に活かしていかなければと思っております。アンケートの結果の一つ一つが、オーナーの皆様にも少しでも満足して頂けるようなオーナー制度を作り上げていくための大切な糧となります。ご協力有難うございました。

～写真集『坂折棚田物語』の紹介～

このほど、坂折棚田を撮り続け、過去に「坂折棚田」を出版された伊藤憲男氏（日本風景写真家 100人）が岐阜新聞社から「坂折棚田物語」を刊行されました。坂折棚田の四季、保全活動の一コマ、坂折の自然現象、などリアルに記録され、まさに坂折棚田の物語りとして編集された写真集です。会員の皆様是非ご購入をお願いします。また知人、友人にご紹介いただきますようお願いします。

購入については、当保存会事務所「さかおりお茶番処」と中野方コミュニティセンターに置いてあります



価格 1冊 2,000円

ご注文は NPO法人恵那市坂折棚田保存会 まで

電話:0573-23-2032 * FAX:0573-23-2046 * E-mail: sakaori-tanada@ia1.itkeeper.ne.jp

棚田保存会 今後のイベント

- 7月19日（火）平成23年度NPO法人恵那市坂折棚田総会 中野方コミュニティセンター 終了
 - 10月 1日（土）オーナー稲刈り
 - 10月15日（土）棚田コンサート、灯火まつり（6月11日雨天のため延期されていた行事）
 - 10月28日（金）～29日（土） 第17回全国棚田サミット 徳島県上勝町
 - 11月 ~~4~~⁵日（土）収穫祭
 - 11月 ~~27~~²⁶日（土）～~~28~~²⁷日（日）第6回石積み塾
- 開催日未定 東京棚田フェスティバル参加予定

あとがき 3月11日以来、日本中が心落ち着かない日々を過ごしているようです。こちらは被災地からは遠く離れておりますが、何をしても心の底から楽しめないような気が致します。棚田通信を発行しなければと思いつながら、なかなかエンジンがかからないでいたのですが、「なでしこジャパン」の活躍で力をもらい、ようやく13号の発行にこぎつけました。

今回は、棚田オーナーの岩崎建彌さんに原稿をいただき、掲載することができました。

皆様のご感想、ご投稿などお待ちしております。

NPO法人恵那市坂折棚田保存会 電話:0573-23-2032 * FAX:0573-23-2046 * 携帯:080-1553-0315

E-mail: sakaori-tanada@ia1.itkeeper.ne.jp ホームページ : <http://sakaori-tanada.com>